

希望は失望に終わることはない

なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。聖書

今年もまた、夏が巡ってきました。ここ数年、異常気象が続いているだけに、「今年の夏はどうか」と気を揉まされますよね。

好むと好まざるに関らず季節は移り、世のなかは変わっていきますが、変わることはないのが聖書です。その聖書で、「いつまでも存続するもの」として挙げられているのが、「信仰と希望と愛」の三つですが、今回は、この内の「希望」に焦点をあてます。

人生で、欠かすことのできない希望

わたしたちが生きていくうえで、欠かすことのできないのが希望です。不確かで、思う通りにならない人生だからこそ、希望は欠かすことができないのです

一口に「希望」と言っても、「願い求めること」ですから、ピンからキリまでありますよね。「コップ一杯の水が飲みたい」といったようなものから、「人類の希望」といったようなものまで、実に様々です。効率や効果といった評価の中で生きていますから、つい、「小さい」「大きい」とか見比べてしまいがちです。しかし、置かれている立場や状況によって必要性は全く異なるのですから、第三者が軽々しく評価するのは好ましくありません。希望は、その人本位なのですから。

このように様々な希望がありますが、その希望は、願い通りになる場合もあれば、そうならない場合もあります。願い通りではなかったものの、違った形で得られる場合もあります。また、本人ではなく他者が得たり、時代を経て叶えられるような場合もあります。いずれにせよ、希望は欠かせないのです。

変わっていく希望

しかしその希望も、年を重ねていきますと段々と現実に近いものへと変わっていきます。

よく知られていますように、「明治維新」を成し遂げた主役は「若者」でした。そこには日本の将来に対する希望がありました。しかし彼らは達成はしたものの、深い挫折を味わいました。わたしたちも年を重ねるなかで、理想と現実の違いに直面したり、失望や挫折を重ねるなかで、夢物語的な希望から、達成されそうな希望へと変わっていきます。「がっかりしたくない」との、自分を守ろうとする本能のせいなのでしょう。残念ですが。

失望に終わることのない希望

そのような私たちに対して聖書は、「希望は失望に終わることはない」と告げていま

す。その言葉を、以下に紹介しましょう。

「わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終わることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである」

ローマ人への手紙 5章 2～5節

失望に終わることのない希望、それは「信仰によって与えられ、神の愛によって確かなものとされている」と結ばれています。

この地上の人生だけではなく、地上の生涯を終えられた後、神の国に入ることができるとの希望をもって歩んでいただきたいのです。祝福を祈らせていただいています。



牧師 和田 忠三

どうして教会に行くの？

あかし
生かされています



高原啓彦

私は、4月で70歳になりました。振り返ってみると、聖書の「今いまし、昔いまし、やがて来るべき方」まさにこの方に守られてきたと実感しています。
生後4か月目に長崎で原爆にあうも生き延び、終戦と同時期に、親の故郷、韓国の済州島(チェジュトウ)に渡り、小学6年生の秋まで過ごしました。そのあいだ、済州島四・三事件で祖父母を、韓国動乱(六・二五事変)では叔父を亡くしました。両親は出稼ぎで日本へ渡つており、私は幸いにも、母方の祖母と元気が暮らしていました。村の小さな教会が遊び場で、同年代の友達と讃美歌を聞き、教会の鐘を鳴らすことが格別な楽しみでした。
小学6年生の秋、突然、日本にいた両親のもとに行くことになり、不安に震えながら日本に渡りました。両親とは再会できませんでした。言葉の壁に苦しみ、学校の授業も、韓国と日本の大きな違いに戸惑い、ついていくことが出来ず苦勞

クリスチャンのさまざまな体験を綴ります

しました。更に、日本に来て2年後に父が病死し、経済的な面でも苦勞しました。そうしたなかで必死に頑張つて高校を卒業し、念願の大学の学部へ入学し、学士を得、某私学の数学講師に就きました。すると、心が満たされていた少年時代の海や教会の鐘の音を思い出し、讃美歌を口ずさむこともありました。
聖書には「神は既に、私を知っておられた」とあるとおり、勤務先にクリスチャンの先生が居られ(後の妻です)、聖書を読むようになりました。結婚後、教員の給料のみでは不足がちで、転職をし、日曜礼拝を守る充実の日々を過ごしました。
ところが、2年後に会社が倒産し、更に、再就職先の会社で負傷、腰を手術することにになりました。その激痛は忍耐をはるかに越え、ひそかに飛び降り自殺を試みました。しかし、後遺症で窓枠まで足が上がり、思い留まりました。
やはり「神は我を忘れず」のとおり、私は生かされていることを実感しております。
転職を重ねましたが、今の職場で30年の勤続もでき、現在も讃美歌を口ずさみながら通勤しております。本当に感謝の日々です。